

私には、「難民支援の質を向上させ、世界全体で温かい支援を届ける世の中をつくる」という目標がある。この目標の原点は、小学生の頃、日本人初の国際連合高等弁務官である緒方貞子さんの存在を知り、同時に難民という存在を初めて認識したことにある。彼らが直面する厳しい現実を知り、衝撃を受けた。また、両親が毎月難民募金をし、NPO法人からのパンフレットを目にする環境で過ごしたことで、次第に「実際の世界を自分の目で見たい」と強く思うようになった。そして、その思いが私を留学への関心を高め、実際に行動を起こすきっかけとなった。

高校1年生のとき、私は学校の留学プログラムを利用し、オーストラリアで2週間のホームステイを経験した。初めての海外生活に不安と緊張でいっぱいだったが、オーストラリアの人々の温かさに救われた。彼らは、言葉がうまく通じなくても根気強くわかりやすい言葉で話しかけてくれ、突然やってきた私たちを優しく受け入れてくれた。そのおかげで、私は安心感と喜びを覚え、異文化の中で積極的に交流しようという気持ちが芽生えた。特に印象的だったのは、同じホームステイ先にいたナウル出身の留学生との出会だった。私は難民問題に関心があったため、何気なく彼女に「難民についてどう思う?」と尋ねた。すると、ナウルではかつて難民を積極的に受け入れていたものの、共存の難しさや暴動の発生などを背景に、次第に難民に対して排他的な姿勢へと変わっていったことを教えてくれた。彼女にとって、難民問題は日常に密接した課題であり、深刻な影響を及ぼしているのだと知り、私は衝撃を受けた。

同時に、日本では難民について考える機会が圧倒的に少ないことにも気づかされた。そして、「難民支援」とは単に物資を届けることではなく、受け入れ国と難民との関係性や共生の仕組みを考えることが不可欠であると痛感した。この気づきは、今の私の行動を支える大きな原動力となっている。また、私は言葉の壁にも直面した。拙い英語しか話せなかったため、最初は自分の気持ちを伝えられないもどかしさや不安を感じた。しかし、ホストファミリーや現地の生徒たちは、私の拙い英語に熱心に耳を傾け、積極的にコミュニケーションを取ろうとしてくれた。その優しさに触れ、「言葉が完璧でなくても、伝える、理解しようとする姿勢こそが大切なのだ」と実感した。この経験を通じて、「相手を理解しようとする」ということが人と人とのつながりを築く上で最も重要であると学んだ。それは単なる言葉の問題ではなくて、文化や価値観の違いを乗り越えるための第一歩であると感じた。

帰国後、私はオーストラリアで学んだ「思いを共有する大切さ」を、部活動の中で実践するようになった。部活動は同じ目標に向かって切磋琢磨する場だが、意見の相違や方向性のズレからチームがうまくまとまらないこともあった。かつては、私自身が意見を主張すれば喧嘩になるのではないかと不安に感じ、チームと向き合うことを恐れていた。しかし、オーストラリアで経験した「どんな時でも互いに思いを共有し続ける」という教えを胸に、私は自分の言葉で率直に気持ちを伝えることに決めた。その結果、相手の考えや感情が次第に理解でき、チームが再び一つの目標に向かってまとまる力となった。また、オーストラリアの留学を経て、私は世界の広さに圧倒され、小学生の頃から興味を抱いていた難民支援について、さらに深く学びたいと強く思うようになった。特に、ナウル出身の留学生から聞いた、ナウルでの難民受け入れの現実、単に難民キャンプでの直接支援だけでは捉えきれない、受け入れ国との共生の問題を浮き彫りにしていた。これまでの私の「難民支援」は、支援活動そのものに限定されると考えていたが、現地での話を通じて、受け入れ先で起こる問題や難民に対する偏見といった側面にも目を向ける必要性を感じた。

帰国後、さらに難民について興味を強めた私は疑問を解消するため、実際に難民支援に携わるNPO法人ピース・ウィングスジャパンを訪問した。今までの私ならネット上の情報を調べて自分の心の中に考えを留めてしまっていただろう。しかし、オーストラリア人の自発的にコミュニケーションを取る姿や伝わらなくても伝わるまで諦めずに行動する姿に影響を受けたことで、現場の声を直接聞く決意をすることができた。ピース・ウィングスジャパンは迅速に直接難民に支援を届けることも目標に活動してる団体である。彼らは迅速に難民へ支援を届けることにとどまらず、難民が自立するための具体的な支援策を模索している。実際に難民キャンプで活動されているスタッフの方にお話を伺い、「難民だからできない」という固定観念を捨てるべきだという意見や、難民の大多数はどんなに困難な状況でも与えられた仕事を最後までやり遂げる強い意志を持っていることを聞き、私自身の考えが大きく変わった。彼らの根気強さと、逆境を力に変える姿勢は、難民に対してあまり良い意見を持っていない人々の偏見を少しずつでも変えていける可能性を示していると感じた。

さらに私は、難民の方の声を直接聞き、現状や「思い」を知ることが必要だと考え、NPO法人チャイルドドクタージャパンのバイバイスラムの活動に参加するようになった。私は現在、月に2回、ケニアのお母さんと日本人の学生5人がオンラインで話し合い、お母さんが1年間かけて1万5000円を稼ぐための方法を考えるプログラムに参加している。その中で、現地の暮らしや、日々の苦労、家族への思いを直接聞くことができた。活動の中で特に印象的だったのは、お母さんたちの「強さ」だ。ケニアのお母さんの「毎日、子ども2人の食費や生活費、教育費をやりくりするのはとても大変。でも、子どもたちがいるだけで私は幸せ!」と語る姿や、「今のドレスメーカーの仕事を拡大し、もっとたくさんの人

と働きたい」と未来を見据える言葉には、強い意志が感じられた。どんな環境にあっても幸せを見つけ、目標を持ち続け、笑顔を絶やさない姿に、私は大きな感銘を受けた。こうした経験を通じて、私は「どこの国の人であっても、どんな背景を持つ人であっても、通じ合う思いがある」と確信した。そして、このことを一人でも多くの人に伝え、社会の意識を変えるための行動を起こしたいと強く思った。また、この経験を通して、私自身が強化すべきことや、社会・難民自身が変わるべき点がより明確になった。

まず、私は英語力をさらに向上させたいと感じた。相手の言葉を正確に聞き取り、自分の考えを的確に伝える力があれば、より深い対話ができるはずだ。今の自分の英語力では、自分の思いを十分に伝えきれず、もどかしさを感じる場面が多い。この悔しさをバネにし、さらに学びを深めていきたい。次に、社会や難民自身が変わるべき点として、「互いに知らない部分が多いこと」が課題だと考える。私は、NPO法人の活動を通じて難民の方々と直接関わる中で、彼らの家族や子どもへの愛情が私たちと変わらないことを知った。

難民も私たちと変わらない人間であり、共通する価値観を持っている。だからこそ、日本人が「難民」という言葉だけで固定観念を抱くのではなく、ニュースを見たり、少しでも調べてみたり知る努力をすることで、難民支援に対する考え方が変わるはずだ。一方で、難民自身も、新しい国の文化や習慣を学び、現地の人々と共存できるよう努力することが大切だ。その国で充実した生活を送るためには、まずその国のことを知り、歩み寄る姿勢を持つことが重要だ。互いに相手のことを尊重し、知ろうとする行動こそが、真の難民支援につながると私は考える。

内田勝巴さんの研究によると、日本の難民受け入れに関しては、現状維持を求める意見が多い。しかし、積極的に受け入れを支持する学生の理由としては、「労働不足の解決」や「国家としての信用向上」が挙げられ、反対する学生の理由としては「治安の悪化」が最も多かった。

しかしそんな中でも、長野県川上村では、移住した外国人労働者の力によってレタスの出荷量が日本一になったという成功事例がある。このように、日本の一部では外国人と共存し、地域を活性化させることに成功しているケースもある。

今回、私はオーストラリア留学という旅に出た。その旅は、私に、多角的な視点で物事を考え、様々な環境の人たちとコミュニケーションを築き、自ら行動する力を与えてくれた。この力を活かし、全ての人々が輝ける未来を作るために、これからも活動を続けてゆく。まずは英語力を向上させ、さらに難民と受け入れ側をつなぐ活動をすることで、難民と受け入れ側の方法が納得できる支援の形を模索していきたい。そして日本においても難民問題への理解を広めるために、講演会の開催やSNSでの情報発信など、できることから行動を起こしていきたい。グローバルな難民問題の解決を、この旅が与えてくれた力を生かして、まずは地元の新潟から、誰もが納得できる難民政策を発信していく。

参考文献

研究ノート

難民に関するグローバル・コンパクト

－アンケートから得られた難民問題に対する学生の意識－

内田勝巳